

学生によるアクティブラーニングを用いたオルタナティブな授業計画

森山 三千江
愛知学泉大学

Alternative syllabus planning on active learning by students

Michie Moriyama

キーワード：アクティブラーニング Active learning、家庭科 Home economics、授業計画 Syllabus planning

1. 緒言

初等中等教育において現在の日本の教育は PISA の結果からみても自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力などが児童・生徒に身につけているとは言い難いと言われている¹⁻⁴⁾。このような能力を養うには一斉型授業では難しく、グループ学習などの学習者が自らが積極的に参加する能動的学習であるアクティブラーニングを取り入れた授業形態が適しているとされており、中央教育審議会の諮問では教員に求められる力として、アクティブラーニングを主体的に実践し、集団内の人間関係づくりを進め、生徒の質的向上を促す力であるとしている⁵⁾。しかし、グループ学習などの授業形態は多人数クラスでは工夫が必要であり、適切なグループサイズや学習評価の方法など環境や学習支援などが必要となり、苦手とする教員が多いとも言われており⁶⁾、このアクティブラーニングは授業から半年後に内容を覚えているかどうかを学習形式によって分類比較した結果、学習定着率が高く、学生の習熟度も高かったと言われている⁷⁾。近年では学生参画型授業や協調学習、能動的学習、PBL といった包括的な概念であることを示すとともに、知識基盤社会への対応といった視点で、受動的な学びから能動的な学びとして期待がなされると溝上は示唆している⁸⁾。

これは中央教育審議会でも⁹⁾「教職実践演習(仮称)

には、教員として求められる4つの事項(1.使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、2.社会性や対人関係能力に関する事項、3.幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、4.教科・保育内容等の指導力に関する事項)を含めることとすることが適当である。授業方法については、役割演技(ロールプレイング)やグループ討議、事例研究、現地調査(フィールドワーク)、模擬授業等を取り入れることが適当である。」と示される。竹嶋は中学・高校家庭科教員免許取得の学生に対し、卒業後に家庭科授業でアクティブラーニングでの授業を行う準備として大学の家庭科指導法の中でアクティブラーニングの授業を行っている¹⁰⁾。また、田中は家庭科教員となる学生が卒業後スムーズに教員生活に移行できる力を身につけるため教育実習を最大限に活かしたいとし¹¹⁾、実習時に実践が困難となるため、身につけさせたい授業にグループでの話し合いや相互評価、ロールプレイング用シナリオ作り、全員参加のロールプレイングなどのアクティブラーニングであるとしている。そこで、教育実習前後で本学の教員志望の学生達がこの力を身につけるかどうかを実習の前後で同じ内容の指導案を作成させ、学生のアクティブラーニングを取り入れた指導案から検討することとした。

2. 方法

家庭科教員を目指す本学四年生に教育実習前に指

導案を作成させ模擬授業を行わせた。教育実習後に、実習前に作成した指導案をアクティブラーニングを最大限に使用した指導方法で再構築するように指示し、同じ内容であるが異なる指導案を比較し、教育

方法など三年間学んできた学生がどれほどアクティブラーニングという指導方法を理解しているのかを検討した。

表1. 実習前指導案の概略

番号	単元名	学校別	導入		展開						まとめ		評価方法	
			時間	方法	時間	方法	時間	方法	時間	方法	時間	方法		
1	生活を創る	高校	5	発問	10	プリント記入、説明、発問	8	発問、プリントにより確認	22	作業確認、プリント記入、グループで話し合い、発表	5	解説、感想、プリント回収	有り	
2	家庭経済について考える	中学	10	現物提示、発問、説明	15	グループでの話し合い	15	グループでの話し合い			10	プリント記入、感想、発表	有り	
3	自分らしい人生をつくる	高校	3	本時の内容確認	25	プリント記入、発問	19	発問後発表、説明、プリント記入			3	プリント回収	有り	
4	消費生活	中学	3	本時の内容確認	10	発問と発言内容の板書	15	グループでの意見交換	10	資料提示による説明、板書	7	質問確認、感想、プリント回収	有り	
5	多様な性について知ろう	高校	5	発問	15	グループでの話し合い、発表	10	プリント記入、発表、説明、プリント記入	10	説明、プリント記入	10	解説、感想、プリント回収	有り	
6	子どもの生活を知る	高校	3	発問	10	プリント穴埋め、答え合わせ	30	プリントに絵を描く意見交換			7	内容確認、感想、プリント回収	有り	
7	社会における家庭と地域の関わり	高校	5	発問	12	プリント記入、発表	8	プリント記入、発表	20	グループで話し合い、プリント記入、発表	5	解説、感想、プリント回収	有り	
8	高齢者社会を生きる	高校	5	発問	23	グループでプリント記入、発表、説明	15	介助実習			7	解説、プリント記入、回収	有り	
9	家族・家庭と社会	高校	5	イラスト提示後発問	12	プリント記入、発表	15	説明後、グループで話し合い、発表	15	説明	3	内容確認、感想、プリント回収	記載なし	
10	よりよい住生活をつくる	高校	8	発問と説明(教科書使用)	18	プリント穴埋め、答え合わせ、現物提示	20	グループで話し合い、発表			4	感想、プリント回収	有り	
11	食生活を考える	高校	3	発問	10	プリント穴埋め、発表	20	プリントに記入、グループで話し合い、発表	12	プリント記入、発表	5	解説、感想、プリント回収	有り	
12	衣生活をつくる	高校	3	現物提示	7	説明、発問、プリントに記入	7	実験方法の説明		28	染抜き実験	5	内容確認、解説、感想、プリント回収	有り
13	安全で快適な住生活をつくらう	高校	3	発問	7	プリント記入、発表、説明	20	地震対策チェック	20	警報音試聴、説明、グループで話し合い、発表	5	内容確認、感想、プリント記入、回収	有り	
14	持続可能な社会	中学	5	発問	40	発問、PPによる説明、ワークシート記入					5	ワークシート回収	有り	
15	子どもの生活と遊び	高校	5	本時の内容確認	10	プリント記入、教科書目読、板書で発表	5	プリント記入		18	遊びの実習	2	質問確認	記載なし

3. 結果及び考察

教育実習前の学生 15 名の指導案の内容をまとめたものを表 1 に示した。

(1) 実習前の指導案

1) 学校別

学生 15 名中 12 名が高校、3 名が中学校の授業指導案を作成した。高校の指導案は 12 名中 11 名が家庭総合の内容で作成し、1 名のみ家庭基礎の内容で指導案を作成していた。これは、本研究の指導案作成が 4 年次の授業であり、学生達はそれまでに家庭教育法の授業を 2 年生後期から A、B、C と受講しており、その際に家庭総合の教科書を用いて指導案作成をしていたため、それまでの授業内で指導案作成し、使い慣れた教科書を用いて指導案作成を行ったものと考えられた。なお、家庭基礎で指導案を作成した学生は本指導案作成が教育実習直前であり、実際に教育実習を行う予定校の使用教科書が家庭基礎であったことから、家庭基礎で指導案を作成したと考えられる。同様に中学校の技術・家庭科の家庭分野で指導案を作成した学生は中学校で教育実習を行うため、実習時に指導案作成することを考慮し、より実践に近い中学校の内容で指導案を作成したと考えられた。

2) 導入部

授業の導入部の時間はほとんどが 3 から 5 分であった。中には 10 分とした学生もいたが、内容としては授業の内容あるいは本時の目標を確認する、としていた。導入部分はその授業に対する生徒の関心を持たせることが重要であるが、授業開始時に授業内容の確認だけでは、なかなか関心を持たせることは難しいのではないかと感じられる。中学の指導案を作成した学生の授業内容はそれぞれ家庭経済(No.2)、消費生活(No.4)、持続可能な社会(No.14)であったが生活経験の数ない中学生に興味・関心を持たせるにはいずれも難しい内容である。家庭経済の内容の学生(No.2)は実際に商品を見せて、その商品に付けられているマークを読み取らせようとしている。実際に中学生が JAS マークや特定保健用食品のマークにどれくらい興味を持つか不明であるが、少なくとも現物がなくてマークのみを提示するよりは商品を手取るにより、関心を高めることはできると思われる。また、持続可能な社会の内容で指導案を作成した学生(No.14)は生徒に対し、自分がど

のようなゴミを出しているのかを聞き、そこから日本はゴミの分別に対する意識が高いが、他の国ではどうであろうか、と世界のゴミ問題へつなげるという手法を用いている。中学生にもなると、分別してゴミを捨てている生徒もいると考えられるので、こうした身近な問いかけを導入部として用いることは家庭科の特性を生かしており、導入部としては適切ではないかと考えられた。

さらに、高校の指導案を見るとほとんどが教員からの発問が導入部で取り入れられており、教員の発問から授業が開始されている。しかし、単に会話形式による発問ではなく、授業内容が家族・家庭と社会の学生(No.9)は自分で描いたアニメの家族のイラストを提示することにより、生徒の関心を高めた上で発問する工夫をしていた。また、授業内容がシミ抜きの実験を行う内容の学生(No.12)はまず、自分の古着に汚れをつけて生徒に提示するという手法を用いた。この汚れも水溶性のものと油溶性のものを 3 日前と 30 分前に衣類に付着させるという用意をしていた。このように提示する資料を考えて自分で創るという事前準備をしてきた学生はこの 1 名だけであり、前述の No.2 及び No.9 のように商品やイラストの事前準備よりも時間をかけ工夫した分、生徒への印象は強くなると考えられた。

3) 展開部

指導案での展開部を見ると多くの学生が 3 つに分けて指導案を作成していた。その展開例を見ていくと、プリント記入あるいは穴埋めというものが多く、授業内容に合わせて学生が自分で考案したプリントを作成していた。プリントに記入後、グループに分かれ話し合いをすとした学生は(No.1、2、6、7、9、10、11、12、13、15)と多かったが、プリント記入あるいは穴埋め後に移行するタイミングはそれぞれ異なり、各個人でプリントによる授業内容をよく考え、自分の意見や答えをきちんとまとめた後にグループ内で意見交換をさせ、他人の意見も聞き一方的な意見に固まらないようにさせる工夫も見られた。プリント配布せずグループで話し合いをさせる手法の学生(No.4)は、板書内容を記入するためのプリントを作成しており、ノートに書き写すだけでなく要点をまとめやすくするように表形式にして記入するよう工夫がされていた。グループで意見交換する際には、この表でまとめられたプリントを使用することにより自分の意見をきちんとまとめて話すことが

できる配慮が見られた。これはこの指導案が中学生向けであることから、生活経験が浅く、購買行動にはどのようなものがあるのかもよく分からない生徒に販売方法の一覧表という形でわかりやすくされていた。

また、グループでプリントに記入する手法の学生(No.5、8)で(No.5)の学生は、グループで一枚のプリントを配布し、そこで意見交換して各グループでの意見を発表させるとしている。この学生の授業内容は性の多様性を知るということで、世間一般でもあまり認められていない性的弱者についての授業内容である。このような個人的な問題を授業で取り扱う際にはかなり、教員側が配慮しなくてはならない。授業内容は男性らしい・女性らしい服装と家事分担に対する性役割から性の自認、性的指向まで含まれている。グループでの意見交換は服装と家事分担を高校生がどこまで性別で考えているかを問うものである。その後は教員の板書による説明で生物的な性、性自認、性的指向について考えさせるもので、この時は個人で考えさせグループでの意見交換はせず、又、個人の考えをプリントなどに記入させることはない。教員経験のない学生の考えではあるが、一応個人的な問題としての配慮はされている。しかし、実際にこの内容の授業を行うには、様々な工夫を凝らして入念な準備と教員側の話術が必要なのではないかと思われる。(No8)はグループでの話し合い後にまとめた内容を板書し、お互いのグループでの意見を確認し合うようになっていた。これは、その後には実習を行うための注意点であり、高齢者への介助をする際にはどのような点に注意をするべきかを実習前にきちんと確認してから実習を行うという流れで行われていた。高校生では実際に介助経験のある学生も多くはないと予想されるため、実習の前に注意点を介助し合うグループで共有しておくことは、その後の実習が実際に役立つかどうか左右するとも考えられる。同様に実験を主体とした指導案を作成した学生(No.12)はまずシミ抜き汚れの種類とその原因物質をプリントで確認させ、シミ抜きの方法と手順を資料プリントを使用して説明している。その後、汚れが付着してからの経過時間が異なる水溶性と油性のシミ抜きをグループで行うが、それぞれの汚れに対して何を怠らなければ綺麗に落ちるかを予想して進めなくてはならない。そのため最後の実験に最も時間を要するが、グループメンバーと

話し合いながら実験を体験することにより、学習する内容が印象深くなり記憶に留まると考えられる。また、最初は個人でプリント記入し、その後グループでプリント記入という方法を用いている学生(No.13)は個人向けのプリントに災害の写真と非常用持ち出し袋の中身の写真を用意し、その中に答えを記入させている。その後、災害発生時の警報音を実際に聞かせる、と言う聴覚に訴える方法を用いた授業展開を行った後にグループで話し合いをさせるが写真による視覚と音による聴覚を用いて災害に対する興味関心を高めてからのグループ討議で、話のきっかけをうまく作るようにしている。

その一方でグループでの作業が一切見られない学生(No.14)は教具としてコンピューターを使用したパワーポイントによる展開である。学習内容が持続可能な社会として世界におけるゴミ問題を取り扱っており、こういった内容については説明を言葉で行うより、様々な国の廃棄物や焼却炉などを実際の写真で提示して視覚に訴え、興味関心を高めるとともに理解しやすくしている。さらに様々な国の様子を写真で見せてどこの国であるかを当てさせる授業展開は、テレビのクイズ番組を思わせるため大学生への模擬授業でもかなり積極的に授業に参加している様子が見受けられた。この授業は中学生に対して行うものであるため、世界各国の事情をより知らないと予想される中学生にはこの視覚から入る授業展開はわかりやすく、また参加しやすいと考えられる。ただ一つ問題となるのは実際の中学の現場でコンピューターやプロジェクターがどれくらい整えられており、家庭科の授業で使用が可能であるかである。

4) まとめ

まとめの方法はほとんどの学生がプリントに感想を記入させた後に回収する、としていた。まとめの時間としては2分から10分と幅があったが、2分とした学生(No.15)は授業にについて質問がないかどうか確認するのみで、プリント回収作業は見られず、やはり3分とした学生も(No.3)でもプリント回収作業のみであった。一方、10分とした学生(No.2、5)では、まとめの部分でも発問し、その答えをプリントに記入させ発表もさせていた例(No.2)や授業内容の要点整理を解説し、その後にはプリントへ感想記入と回収を行っていた例が見られた(No.5)。まとめでは授業内容の要点整理とされているが、その方法としては教員によるまとめの解説、あるいは授業内容

を理解しているか確認する項目を記入させる形式となっていた。プリント自体にあらかじめ設問が印刷されていることが多く、教員の問いかけに対して答える自由形式は見られなかった。

5) 評価法

表1の評価方法部分には評価方法にプリントの記載があったものにプリント有りとした(No.14の学生のみワークシートと表現していたがこれはプリントと同意語とした)。評価方法は発言や授業態度、発表なども記載されていたが、やはりークラス生徒全員の態度を評価するのは難しく、プリントに頼るのではないかと考えられる。No.9の学生は評価方法にプリントから評価するとは記載されていなかったが、評価方法からプリント内容を用いなければ評価できないと判断され、No.15の学生は授業内容が実習であり、この授業の大半の時間を占める実習態度から評価するとし、プリントの記載によらず評価するとした例であった。

(2) アクティブラーニングを用いた指導案

教育実習後に以前作成した内容を変えず、アクティブラーニングを用いた指導案に変更するように指示し、作成されたものの概略を表2にまとめた。また、指導案における時間配分を表3に示した。

1) 学校別

実習校に関しては、同じ内容の指導案を改定したため、前の指導案とは変わらない。時間配分が前回の指導案から変更されていない例にはグレーを施した。ほぼ半数の学生が内容変更に伴い、時間配分も変更していた。

表3.指導案における時間配分の変化

学生番号	導入		展開1		展開2		展開3		まとめ	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
1	5	5	10	30	8	10	22		5	5
2	10	10	10	10	15	10	15	10	10	10
3	3	3	25	25	19	19			3	3
4	3	3	10	10	15	15	10	10	7	7
5	5	20	15	15	10	10	10		10	5
6	3	3	10	10	30	30			7	7
7	5	5	12	12	8	8	20	20	5	5
8	5	5	23	23	15	15			7	7
9	5	5	12	10	15	20	15	10	3	5
10	8	3	18	10	20	5		20	4	12
11	3	3	10	10	20	20	12	10	5	7
12	3	3	7	7	7	7	28	28	5	5
13	3	3	7	7	20	20	20	20	5	5
14	5	5	40	40					5	5
15	5	5	10	25	5		18		2	10

2) 導入部

時間配分の時間は変更されていなかったが No.3

の学生では先回の授業中に課題を出して、生徒達に家族へのインタビューをしてワークシートに記入するように伝える、としていた。そのため、導入部ではこのワークシートをもとに授業を進めていくことを伝えている。また、No.5の学生は導入部分が大幅に増え、前回の指導案では5分であったものが20分としている。ジェンダーに関する授業内容であるが、前回の導入部では懸賞に応募する際に自分の性をどのように表記するか、という問いかけであったが、変更案では男女2名ずつの4名の登場人物に対して恋愛のストーリーを考えさせるものになっていた。アクティブラーニングを使用した授業展開ということで、導入部で生徒達が主体となって授業に参加するように工夫されたものであると考えられた。高校生にとっては恋愛ストーリーという点でも興味・関心を持ち意欲的に授業に参加するという狙いもあるであろう。同様の手法でゴミの処理を授業内容としているNo.14の学生も前回の授業時に課題を生徒に与えており、導入部ではその課題をきちんと授業に持ってきているかを確認した後にグループに分けている。その後の展開で、各グループで自分の調べてきた内容を発表させる準備をこの時点で行うようにしている。自分で様々な国のゴミの事情を調べてから授業に参加する手法となっている。これは中学生が自分の調べた内容を発表することにより、積極的にグループ内で発言するように仕向けたものであると考えられ、アクティブラーニングを意識した指導方法を用いようとした学生の意欲が感じられる。また、No.15の幼児の遊びを実習として取り入れている学生は導入で、授業の最後に各グループでの発表をすることを追加しており、これから始まる授業内容をよく把握するように注意喚起している。このことから、授業の実習に対してきちんと取り組まないと最後の発表でうまく伝えられないという意識付けを生徒にしようという狙いであろう。

このように導入部の内容を変更した学生は4名のみであったが、いずれも展開部へ繋がられるように導入から変更されていた。

3) 展開部

展開部分が最も変更されたのはNo.1の学生であった。消費生活の家計についての授業であるが、やはり高校生に家計の収支は実感がわかないと考え、再度作成した指導案では高校生でも興味を持ちやす

いように学生の考案したすごろくで家計のやりくりを体験できるように変更されていた。初めに書いた指導案では、給与明細を示して授業が展開されていたが、すごろくでは給料日、住民税、食品の購入、生命保険料金など日常的なコマに加え、事故に遭う、ギャンブルに失敗、タクシー購入など生徒が興味を持ちそうなコマも加わっており、退職金がゴールとなったすごろくである。これは、家庭科教育法 D の授業の中でライフサイクルゲーム¹²⁾を使用した授業例で紹介したゲームが元になっていると考えられるが、学生の独自性が生かされていた。すごろくを使用し、遊び感覚で授業に参加することにより、計上収入に加え消費支出と非消費支出を理解させるように考案されており、初めの指導案で示された給料明細から始める授業よりも生徒の興味・関心は高くなると予想される授業展開となっていた。また、No.3 の学生は課題を事前に出しており、内容としては初めの授業と同様に発達課題を取り扱っているが、自分史として幼い頃のライフイベントやどのような発達をしてきたのかを家族に聞き取った後であり、具体的に考えることができるようになっている。さらに、グループ内で自分の例をそれぞれ発表することにより、活発な意見交換がなされると考えられる展開となっていた。導入部が初めの指導案より長くなった No.5 の学生はジェンダーで多様な性を扱った授業例である。導入で恋愛のストーリーを考えさせ、性的志向について考えさせた後、展開 A の部分は服装と性で変化はなかったが、展開 B で前回の内容である異性で羨ましいと思うことを生徒に問いかけていた部分を無くし、生物学的な性、社会的性へ移行している。恋愛ストーリーを考えることにより、一人一人が授業に参加することになるが、初めに考案された指導案での異性で羨ましいことを活発な意見を各生徒から出させる授業でもアクティブラーニングにまとめられそうであったが、授業の内容を知らせる前に恋愛ストーリーを考えさせ、恋愛に対してヘテロな性のみの恋愛という固定観念を明らかにさせたいと考えて変更した指導案であるということである。授業内容が実習を行う No.8 の学生は介助の実習を授業で行うとしている。前回の指導案ではグループに分かれて介助をし合うだけで終わっていたが、変更案では実際に介助を行い、介助者の負担を減らすにはどうしたら良いかをグループ内で話し合った後、もう一度介助を行うように変更している。

初めの授業からロールプレイングの要素が多い授業例であるが、変更されたものは実習を通して生徒同士が意見交換し、それを実践して確認するという生徒主体が前面に押し出されるようになっている。高校生がイメージしにくい家族・家庭と社会を扱った No.9 の学生は前回の授業から導入部にアニメのキャラクターを用いて生徒の興味を引くようにしている。変更した指導案ではより具体的に考えられるように、自分が将来、家族を持つとしたらどのような家族をイメージするか、と発問しグループ内で発表させるようにしている。生徒の家庭環境に配慮が必要となる分野であるが、現在の家族を問いかけるのではなく、将来の家族をイメージすることにより活発な意見交換をできるように考案されている。食品添加物を取り扱った No.11 の学生は展開 B の部分に実験を取り入れた授業に変更していた。前回はグループごとに食品表示を見て添加物を書き出していくという授業展開であったが、変更した指導案では実際に添加物を使用してコーヒーフレッシュを作り、その後食品表示を見せ、食品添加物の役割や食品衛生法についても興味・関心を持って授業に取り組むように工夫がされている。グループでの実験と話し合いが多くなり、生徒達が積極的に授業に参加するように促している。ゴミ問題を取り扱った No.14 の学生は前回の授業で課題を出しており、その課題を各グループが発表するという形式に変更している。初めの指導案ではパワーポイントを使用して各国のゴミの事情を見せていたが、アクティブラーニングを用いるということで教員の提示した資料を見るという受け身でなく、自ら調べた内容を発表するという形式に変更したと思われる。生徒達はお互いに自分も調べたが他の生徒はどのようなことを調べてきたのであろうか、という興味からお互いを刺激し合い、活発な意見交換がなされる授業となるように工夫されていた。

以上の例に挙げていない学生達の変更案は、前回の指導案から大幅に変更がなされていなかった。これらの学生達の指導案の特徴として前回の指導案がすでにグループ学習や実験あるいは実習を取り入れたものが多かった。学生達の考えるアクティブラーニングはグループによる意見交換や討論の形式、あるいは実験・実習と捉えているようである。しかし、アクティブラーニングは松本¹³⁾によれば表現活動、実習・実験、課題探求、グループ・ディスカッション

学生によるアクティブラーニングを用いたオルタナティブな授業計画

表2. 訂正後指導案の概略

番号	単元名	学校別	導入		展開						まとめ		評価方法
			時間	方法	時間	方法	時間	方法	時間	方法	時間	方法	
1	生活を創る	高校	5	発問	30	ボードゲーム、プリント記入	10	発問、プリントによる説明			5	発問、解説	有り
2	家庭経済について考える	中学	10	現物提示、発問、説明	10	グループでプリント記入、答えした後正解を板書	10	持ち寄った現物をグループ内で紹介	10	プリント記入、グループで意見交換	10	プリント記入、発表	有り
3	自分らしい人生をつくる	高校	3	課題の確認	25	課題プリントをもとに新プリントに記入、グループ討論、発表	19	発問、説明、プリント記入			3	プリント回収	有り
4	消費生活	中学	3	本時の内容確認	10	発問、答えを板書	15	グループで意見交換、まとめた意見を板書	10	説明、グループで考える	7	質問確認、感想、プリント回収	有り
5	多様な性について知ろう	高校	20	プリントにストーリー作成	15	発問、グループによる話し合い、発表	10	説明、プリントへの記入内容確認			5	解説、感想、プリント回収	有り
6	子どもの生活を知る	高校	3	発問	10	プリント記入、答え合わせ	30	師範提示、絵を描く、グループで絵について説明しあう			7	発問、グループによる内容確認、感想、プリント回収	有り
7	社会における家庭と地域の関わり	高校	5	発問	12	プリント記入、発表	8	プリント記入、発表	20	グループによるプリント記入、まとめを模造紙に記入、発表	5	解説、感想、プリント回収	有り
8	高齢者社会を生きる	高校	5	発問	23	グループでプリント記入、まとめた内容を板書	15	介助実習、介助のポイントについてプリント記入			7	解説、感想、プリント回収	有り
9	家族・家庭と社会	高校	5	イラスト提示、発問	10	プリント記入、発問と発表	20	資料提示、発問、グループで話し合い、発表、意見を板書	10	発問、プリント記入、グループで意見交換	5	発問、感想、プリント回収	記載なし
10	よりよい住生活をつくる	高校	3	発問	10	発問、プリント記入	5	発問、回答をグラフで提示、説明	20	プリント内容をグループで話し合い記入	12	まとめをグループでプリント記入、プリント回収	有り
11	食生活を考える	高校	3	発問	10	プリント穴埋め、発表、説明	20	発問、実験(方法説明、結果プリント記入)説明	10	プリント記入、発問と発表、説明	7	解説、感想、プリント回収	有り
12	衣生活をつくる	高校	3	現物提示	7	プリント記入、発表、板書内容をプリントに転記、発問	7	プリントにより実験方法の確認	28	実験、結果の話し合い、結果を板書により発表	5	発問、解説、感想、プリント回収	有り
13	安全で快適な住生活をつくらう	高校	3	発問	7	プリント記入、発表	20	地震対策チェック、現物提示	20	警報音試聴、説明、グループで話し合い、発表	5	解説、感想	有り
14	持続可能な社会	中学	5	課題の確認	40	グループ発表、発表内容の説明と補足、ワークシート記入					5	解説、内容確認、ワークシート回収	有り
15	子どもの生活と遊び	高校	5	内容の確認	25	教科書目録、グループで意見交換、遊びの実習					10	質問確認、グループによる発表	記載なし

ン、プレゼンテーションなどの学習活動と幅広い。さらにその技法として山地¹⁴⁾が挙げている例として Think-Pair-Share 法、ラウンド・ロビン法、ピア・レスポンス法、ジグソー法、マイクロ・ディベート法 LTD(Learning Through Discussion)法、学

生主体型実地調査、多人数双方向型授業、チーム対抗型多人数討論がある。このように多岐にわたる指導方法を大学に在学中に教わる機会は本学ではほとんど無いという現状である。さらに、学習評価についてグループ活動が多くなると個人の成績をどのよ

うにするのかという問題も出てくる。その点について学生がどこまで考えて授業を構築しているのか、今回の指導案からは汲み取ることは難しかった。

4) まとめ

まとめ部分は No.1 の学生が前回の指導案では自身の体験談から解説していたが、今回はすごろくというゲームによる授業展開であったため、その中で得られると思われる知識を発問という形で確認するという形式に変更していた。実験を取り入れた No.12 の学生も単に実験を行っただけにとどまらず、グループ単位でシミの落ちた原因や落ちなかった原因を考えてまとめさせる、という内容が加えられた。実験を行うだけがアクティブラーニングではなく、学生が関わることであり、学生が振り返り、分析・総合・評価といったより高次のアカデミック・スキルを用いることである¹⁵⁾、とも言われており結果が単に実験に成功した、あるいは失敗であったで終わるのではなく、その結果を分析して次の段階に繋げていくことが重要である。その点について最後に実験結果をグループ単位で考えさせるということはアクティブラーニングを用いた授業といえるのではないかと考えられた。

その他の学生達の変更案ではまとめ部分に関しては変更が見られず、真にアクティブラーニングを用いた授業例とするのであれば、まとめ部分にも考慮が必要ではないかと考えられる。

5) 評価法

評価法については、前回は作成した指導案と変化はなく、授業態度や発言、発表及びプリントからとしていたものがほとんどであった。一般にアクティブラーニングを用いた授業としてグループによる意見交換や話し合い、あるいはグループのメンバーでプリント記入などを取り入れた授業では、個人の成績評価をすることは難しいとされる。アクティブラーニングを取り入れた授業は指導案作成のみで実際には行っておらず、一学級の全員の個人評価がどれほど困難になるのか授業経験がほとんど無い学生達には予想が困難なのではないか、と考えられた。

4. 要約

アクティブラーニングを使用した授業ではグループによる意見交換や作業や実験・実習を取り入れ

ば良い、という認識の学生が多く見られた。しかし、細かな配慮がなされていない指導案が多く、アクティブラーニングが目指すところの授業には満たない事例が多かった。これは大学の授業内において様々な指導方法を身につけさせる機会が非常に少ないためであり、教職における授業の指導方法に関する授業内容を大幅に見直す時期が来ていると考えられる。

引用文献

- 1) 国立教育政策研究所, 生きるための知識と技能, OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2006 年調査国際結果報告書, ぎょうせい (2007)
- 2) OEC, 図表でみる教育 OECD インディケータ (2007 年版), 明石書店 (2007)
- 3) 下村勉, 小山史巳, 白井靖敏, 鷲尾敦, 須曾野仁志, 落合英次: 「総合的な学習の時間」の学習効果の分析, 三重大学教育実践総合センター紀要 25, (2005)
- 4) 白井靖敏: アクティブラーニング (グループ学習) の経験に基づく学習タイプ, 名古屋女子大紀要, 57, 117~125 (2011)
- 5) 中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」 (2014)
- 6) 白井靖敏, 鷲尾敦, 下村勉: 体験型教員研修の成果と課題, 名古屋女子大学紀要, 第 56 号人文・社会編, 53~66 (2010)
- 7) 稲葉浩幸: アクティブラーニングによるリスクと保険に関する教育の試み, 商経学叢, 経営学部解説 10 周年記念論文集, (2013)
- 8) 溝上慎一: カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点、 -アクティブ・ラーニングの検討に向けて-, 京都大学高等教育研究, 12, 153~162 (2006)
- 9) 文部科学省, 「今後の教員養成・免許制度の在り方について(中央教育審議会答申)」 (2006)
- 10) 竹嶋啓子: 家庭科指導法 I におけるアクティブラーニングの実践報告, 武庫川大学 学校教育センター年報, 2, 125~134 (2017)
- 11) 田中由美子: 教育実習の効果と課題に関する探求 - 家庭科教育実習生が身につけたい資質能力-, 九州女子大学紀要, 53, 231~243 (2016)
- 12) 第一生命 DSR 品質推進部 「ライフサイクルゲーム II~生活設計のススメ~指導の手引き」 (2012)
- 13) 松本浩司: 教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学 (4) -おしゃれ教育カリキュラムの提案-, 名古屋学院大学論集, 53, 89-107 (2016)
- 14) 山地弘起: アクティブ・ラーニングの実質化に向けて, JUCE Journal, 1, 2-7, (2014)
- 15) McManus, M and Taylor, G.: Active Learning and Active Citizenship: Theoretical Contexts, CSAP, 10 (2009)